
英雄

南高陽介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

英雄

【Nコード】

N6670Y

【作者名】

南高陽介

【あらすじ】

科学の進歩、それは新たな脅威を生み出す。

アフリカにおける米中の代理戦争にBSC(Bio Science Creature)と呼ばれる生命兵器が導入される。戦果を挙げるものの、非人道性と生命倫理を無視した行為のために国連で禁止された。これに反発した科学者がBSCを逃がし、世界各地に出現するようになる。

被害を食い止めるため国連は世界防災連合(WDU)を組織し、その実働部隊として防災特殊部隊(DTF)を各地に創設した。

これは、人類の平和を守る彼らの物語

プロローグ（前書き）

初投稿です。拙筆で申し訳なくなります。
書き表し方、基本、ルール等早めに覚えるのでご容赦下さい……。

プロローグ

2055年 アフリカ 某所

アフリカの雄大なる大地に日が沈もうというとき、一人の若者が煙草に火をつけ写真を眺めていた。

「あと4日で帰れる」

故郷の地へ思いを馳せながら、煙を吐くように呟いた。そのとき、けたたましい警報が鳴り響き、スピーカーが叫んだ。

「総員第1種戦闘配置」

若者は、すぐさま銃を担いで走り出した。

銃声が鳴り響き、人の怒号と悲鳴が飛び交う。

「全然効いてないぞ、この化け物！」

「駐営地は放棄、直ちに撤退する。集結点はB－3だ走れ！」

隊長の指示が飛んだ。

若者は全力で走りだした。

（こんなところで、死ぬわけにはいかない）

その瞬間、強い衝撃を受け宙を舞い、地面に叩きつけられていた。

「もう駄目か」

薄れゆく意識の中で、巨大な黒い影が迫ってくるのが分かった。

「ごめん……」

意識は深い闇の中へと消えていった。

1－1. 新たなる脅威（前書き）

人が人であるうちは必ず過ちを繰り返す……

1-1. 新たなる脅威

2060年 夏 災害特殊部隊（DTF）日本支部作戦室

「本部の偵察船が太平洋上で大型の漁影を確認、第1種監視対象として警戒せよとのことです」

オペレーター白木のよどみのないはっきりとした声が作戦室に響く。

「奴さん久しぶりに現れたな。腕になるぜ」

「あんた本当デリカシーないわね、馬鹿じゃないの。」

「馬鹿……って、おい！」

「南野、北見、二人ともその辺にしとけ。」

副隊長の西村がたしなめる。

「すみません！」

「はい……すみません。」

一応の謝罪の後、すぐに小声で喧嘩を始める。そんな様子を見て苦笑しながら西村が尋ねる。

「隊長、どうしますか？」

隊長と呼ばれた男は、腕を組んだまま微動だにしない。やがて、まくし立てるように口を開いた。

「監視対象の捕捉を早急に行う。初代と仲里が戻り次第調査に向かう。白木、太平洋沿岸の自治体に遊泳禁止措置の通達を頼む。」

それだけ言うと銅像のように沈黙する。

(テンパってるな……)

西村は微笑んでいた。

＊

千葉県九十九里海水浴場

地球温暖化が進み、最高気温が関東でも40度を近くなることは
ざらである。

そのおかげで各地の海水浴場は盛況となっている。

「現在、太平洋沿岸一帯に怪獣注意報が発令されました。海から上
がって下さい。」

市の広報車からやる気のなさそうな声がスピーカーから聞こえる。

「まったく、注意報だして何もなかったら文句言われるの俺達なん
すよ」

「まあまあ、何かあってからじゃ責任取れないしな」

「普通誰も従わないですよ」

ほとんどの場合、注意報が出てても何も起きない。このようなことが、
人間の警戒心を緩めていくのだ。

「何だあれ？」

一人の海水浴客が異変に気がついた。海の一部が異様に盛り上がっているのだ。

そしてそれは、こちらへと近づいて来ている。

衝撃は車に乗っていても分かる程大きなものであった。

慌てて車から降りた市の職員が見た光景はこの世のものとは思えないものだった。隊長40mはあろうかという鰐が人を襲い、逃げ惑う人々であたりは騒然としている。

「何だよ……これ」

二人は呆然と立ち尽くすしかなかった。

やがてあたりは何事もなかったかのように静まり返り、聞こえるのは波の音だけであった。

1-2. 新たなる脅威

D T F 作戦室

「千葉県九十九里海水浴場でB S Cが出現したとの通報がありました」

作戦室の空気が真夏であるのにもかかわらず凍りついた

「被害状況は？」

東山の鋭い声が飛ぶ。白木は困ったような顔をしながら答えた。

「不確定情報ではありますが、死亡者は30名を越えているのではないかということです」

「おい！嘘だろ！過去そこまでの被害が出たことなんてないぞ」

「落ち着け！まだ確定情報じゃない」

西村も南野を宥めたものの焦りは隠しきれていない。これと対象的に、北見は驚くほど冷静だった。

「初代と仲里を待つ猶予はありませんね」

「そうだな。西村、南野、北見は直ちに現地へ向かってくれ。それと、重火器の使用を許可する」

東山の決断は驚くべきものである。

重火器の使用は緊急時と通常装備で対応ができないときの特別措置で、支部長の許可が必要となっているからだ。

「了解！」

3人は作戦室を飛び出した。

＊

千葉県九十九里海水浴場

血で赤く染まった砂浜、押し潰された人間の遺体、転がる肉片、現場はまさしく地獄絵図であった。

駆け付けた警察官達もあまりの惨状に何もできないでいた。

そこへ一台の車が走り込む。黄色の車体に黒のライン、赤字でDTFが書かれた特殊戦闘車両である。

濃紺の戦闘服を着た3人が車から降りてきた。通常、調査の場合スーツ型の制服を着用する。重火器の許可といい事態の深刻さが窺える。

「ご苦労様です。千葉県警の豊橋です」

「DTFの西村です。早速ですが状況は？」

「詳しい状況は不明です。今、お話を伺っているところです」

「使えないわね」

北見が聞こえる程度に呟く。

「言いたいことがあるならばっきりお願いしたいもんです」

「じゃあ言うわ。事件発生から30分も……」

言い終わらないうちに南野が遮って、後ろに引っ張っていく。

「突っ掛かるのはやめろ。どうみても所轄の警察官が対処できる状況じゃないだろ」

「警察出身だからって肩持つのはやめなさいよ」

「それは関係ない。お前冷静に見えてそうでもないんだな」

しばらく言い合いをしていると

「そろそろいいよね？」

顔は笑っているが、西村は有無を言わせない口調である。2人は反論する余地すらなかった。

「南野君は現場にいた人に話を聴いてきてくれ、北見さんは僕と調査。以上」

「了解」

2人は同時に返事をした。

＊

被害者達は海の近くにあるホテルに集められていた。南野は一人一人話を聴いていった。

（情報は大きな鰐ってことくらいか）

現場に戻ろうとしたとき、若い女性が声をかけてきた

「あの……これ」

そういいながら多機能端末を差し出している。

「録ったの？」

女性は小さく頷いた。

「ありがとう！ちょっと借りるね」

務めて明るく振る舞った。端末を受け取り、ホテルをあとにした。

「こちら、南野。本部応答願います。」

『こちら、本部の白木です。どうぞ』

「映像を手に入れたので、そちらで解析お願いします」

『わかりました。転送してください』

＊

現場に残った2人は調査を始める。

「酷いですね。早めに遺体を収容してもらった方が……」

「そうだね。BSCがいらない以上僕たちにできることは限られるからね」

「私……BSCだけでも許せないんです」

「それは隊員として？それとも個人の意見？」

北見はまるで聞こえていないかのような顔をしている。

「答えたくないなら構わないよ。ただ、復讐という気持ちに縛られるのはあまり感心できないよ」

「私の気持ちなんてわからないわ」

今度は絶対に聞こえない声で呟いていた。

＊

DTF作戦室

「全員集まったな。白木始めてくれ。」

「はい。南野さんが送ってくれた映像を解析しました。これを見て下さい」

大型のスクリーンに人が逃げ惑う映像が映される。

「逃げ惑う人だけかと思われませんがここを見て下さい」

白木がポインターで示した場所に全員が注目する。そして、白木がキーボードで何か操作をするとその部分が鮮明となった。

「尻尾だ！」

初代が指摘する。

「そうです。海に潜るところを映したようです。これをアーカイブと照合したところ該当BSCがいました」

クリックすると、画面が鰐のようなBSCの画像に切り替わる。

『識別コードUSA-F09』

BSCにおけるコードには意味があり、創造国、種別、創造番号を表している。今回の場合だとアメリカ魚型の9番目ということになる。

「非常に凶暴で肉食、魚型ですから水中を高速で泳ぐことも可能です。あと、皮膚が非常に硬いという特徴もあります」

白木の説明に、みんなため息をつくしかなかった。

「それにしても、今までどうして被害が出なかったんでしょうか？」

仲里の疑問は的を得ていた。今回のBSCは今までに目撃情報すらないのである。

「確かに気になるところではあるけど、対策を先に練ろう。弱点は記載されてる？」

西村の客観的な意見が入る。DTFはBSCの殲滅が最優先となっているからだ。

「はい。魚の特徴を加えたことでエラ呼吸となっているようで、陸上での活動は10分が限界のようです。」

「弱点と言えるか、それ」

南野は机の上に突っ伏してしまった。長い沈黙の時間が流れる。

「魚だから釣っちゃいますか」

初代の冗談で場が少し和んだ。

「釣れるわけないだろ」

「初代も馬鹿だったのね……」

「初代君まじめに考えてよ」

「それ使えるな」

「ですよね……ってええ！」

東山の思いもよらない一言に西村以外全員が度肝を抜かれた。

「よし、釣り1号作戦に決定だ」

そう言うとき作戦室を出て行ってしまった。啞然とした顔でそれを見る隊員達に

「お前ら早く慣れるんだな」

それだけ言うと、西村も席を立った。

1-3. 新たなる脅威

「作戦は以上だ」

「本当に……やるんですか？」

南野は再度確認する。それほど奇抜な作戦であったのだ。

「なんだ？ 異議か」

「異議というか、肉積んだ船を餌にして食いついたら大型の巻き取り機で引き揚げるなんて……正気とは思えないんですけど」

「俺は正気だ。それに引き揚げたらクレーンに吊した鉄球を上からくらわす、火器が通用しなくても問題ない」

南野は瞬時に諦めた。こうなると東山の意見を変えることが容易でないことを知っているからである。

「技術局の全面的な支援も得られる。多分……大丈夫だ」

西村が何とか場を取り持とうとする。そんな光景を見て

（副隊長は苦勞してるんだな）

初代と仲里はそう思わずにはいられなかった。

「引き揚げた後のフォーメーションは3-2-1で展開。奴が後退

しないように南野、北見、西村で攻撃。尻尾には気をつけろ。」

「了解」

「初代と仲里は横に行かないように左右から誘導攻撃。まあ安全だろ」

「了解しました」

「前方は俺が責任もって務める、以上だ。解散して休んでくれ」

「肝心な要地の確保はできてるの？」

2人だけになった作戦室で西村が尋ねる。

「心配するな。今から都知事に掛け合う」

「あの知事、頭だいぶ固そうだけど」

「拒否してきたら切り札をつかう大丈夫だ」

「お前がそう言うなら大丈夫だろ」そう言って西村は作戦室を後にした。

＊

東京望の島

夢の島に倣って名付けられたこの埋め立て地は、5年前より開発が停止している。莫大な税金が使われたこともあり批判の矢面に立たされている。

「都知事が開発停止中とはいえよく承諾してくれましたね」

初代は素直に感心している。

「幸せね。何でも信じられて」

北見が皮肉を言う

「え、何か裏があるんですか？」

ひととき大きな咳ばらいが会話を遮る。

「作戦は0900から始める。各自装備の点検だ」

「了解」

装備は携帯型対BSC砲が主装備として使われる。着弾時の衝撃と爆風で大型のBSCの侵攻を食い止めるために使われる。

＊

「隊長、今日は諦めませんか」

南野がお願いしますよという口調で言う。

「釣りの醍醐味は待つことにある」

「もう5時ですよ。8時間待って気配すらないんですよ」

「まあ、そういわないで。日の入りまで粘ろう」

西村が間を取り持つ。しかし、隊員達は緊張からの疲労からか、今日はもう来ないだろうと油断していた。その時だった。

『当たり前です！餌に食いつきました』

白木から通信が入る。

「総員、持ち場につけ！！」

腹の底からの怒声に隊員達は目が覚めた。

待機室を飛び出し戦闘態勢に入る。

改造された巻き取り機が嫌な音を立てて軋み、物凄い勢いで釣り糸である特殊合金線が引き出されていく。

「残り何mだ？」

『1000mです』

「よし、残り200mでリバースしてくれ」

『カウント始めます。5、4、3、2、1、リバース開始』

激しい動力音とともに釣り糸が巻き取られていく。BSCは左右に泳いで抵抗している。

『残り50mで引き揚げられます』

やがてその巨体が見えてくる。黒々とした身体、大きな口、鋭い牙。画像で見た印象とは全く違う。まさしく化け物である。

計画によると、海から100mの地点が鉄球落下地点になっている。しかし、80m引きずったときだった、激しい抵抗により鉄線が断裂した。

「まずい！作戦変更だ。」

総員、後方から奴を追いつ立てろ」

瞬時に状況判断して作戦を立てる。

「了解」

すかさず4人は走り出し、後方へ展開する。そして、BSC砲の引き金を引く。

ドン！

ドン！

激しい炸裂音が響く。BSCはじりじりと前へ進んでいく。

「よし！落……」

その刹那、BSCは前に突っ込んだ。隊員達には隊長がそれに巻き込まれたように見えた。

「東山隊長！」

BSCは鉄球を吊していた大型クレーンに激突した。バランスを崩したクレーンは前のめりにゆっくりと倒れていった。

衝撃と土煙、隊員達は呆然と眺めていた。そして、土煙の中から何かがこちらに近づいてくる。

「構え！」

西村の号令で砲を構える。

「作戦は……概ね成功だ」

「隊長！」

土煙から出てきたのは東山であった。全員が駆け寄る。

「死んだかと思いましたよ」

「これくらいでは死ねん」

「奴はどうなりました？」

「北見は相変わらず冷たいな……死んだよ、多分」

やがて土煙がおさまり、辺りの様子がわかるようになった。

そこには、クレーンのアームの下敷きとなり絶命したBSCがいた。

「作戦は思いつきでやるもんじゃないな」

東山はしみじみと呟いた。

「当たり前だろ」

とは誰も突っ込めないのであった。

1-3. 新たなる脅威（後書き）

読んでくれている、数少ない人に感謝しています。感想、レビュー等は気軽にどうぞ。

次回はもう少しうまく書けると思います。

では、またよろしく願います！

2-1. 人と鬼の狭間で（前書き）

未来は自らの手で切り開くものだ……

2-1. 人と鬼の狭間で

夏の陽射しは、容赦なくアスファルトを照り付ける。地球温暖化の影響で、日常的に最高気温が40度となる。外は地獄のような暑さである。

時刻は15時を過ぎ、下校する児童や学生の姿が目につく。日常の光景である。そんな光景に合わない、一台の車が走っている。

「こちら初代。異常ありません」

本部へ定時連絡をいれる。

『お疲れ様、本部了解です』

オペレーターの白木のはっきりとした声が無線から聞こえる。DTFは、目撃情報などをもとに地域を決め警戒任務につく。

警察庁は快く思っていないようだが、DTFでは重要な任務として位置付けられている。格好が警察官と似ていることからよく市民に間違えられている。

「それにしても暑いな」

「仕方ないですよ。人間が自分でこうしたんですから」

初代の同期の仲里が運転しながら答える。

何事もなくパトロールを終えようとしたとき、初代がふと窓の外

公園を見ると。小学生1人が3人に囲まれている。

「ごめん、ちょっと止めて」

仲里が車を止めるや否や、初代は車を降りて、その集団に向かって話しかける。

「ちょっといいかな？」

3人は走り去ってしまった。

「さっきの友達？」

「別に……」

「困ってるなら、俺が話を聞くよ。俺はDTFの初代真。よろしく」

「……平良。平良悠紀」

少年は小さな声で答えた。服は泥にまみれ、所々血が出ている。優しく声をかけられたせいかな、急に泣きそうな顔になる。

「おいおい。男が泣いていいのは妹の結婚式だけだぜ」

「何変なこと言ってるのよ」

いつの間にか来た、仲里に頭を叩かれる。それ見て、悠紀の顔に少し笑顔がもどる。

それから、公園のベンチで2人は悠紀の話を聞いた。

「友達は自分で作るんだ。諦めるな。それに俺達はもう友達だ」

「本当に？じゃあ僕の2番目と3番目の友達だ。」

悠紀は無邪気に喜んでいる。

太陽は西に傾き、橙色に輝いている。都会では珍しく蝸が”カナカナ”と泣いている。

「あ、もうこんな時間だ。帰らなきゃ」

悠紀は駆け出す。公園の出口で振り向き「またね」と言い、走り去っていった。

「俺達も行こうか」

2人が車に戻ると、いきなり東山の怒鳴り声が無線から響く。

「どこ、ほっつき歩いてんだ」

とうに帰隊時間は過ぎ去っており、隊長はお冠であった。

初代は「すみません」とだけ言い無線を切った。

「無線切ったのはあなたよ。私知らないわよ」

車が夕日に向かって走り出す。

「今日も平和だね」

初代は額の冷や汗を腕でこすった。

「2人何してたんだって？」

西村がにやにやしながら聞く、

「子供と戯れてたらしい」

「彼ららしい。仏のような優しさを持ってるからね」

「いつかは鬼になるときが来るさ」

東山は寂しそうに言った。

＊

男が1人夜道を歩いている。

空が曇っているせいか星も月も見えない。道を照らすのは街灯の無機質な明かりだけである。

そんな不気味さからか、自然と足早になる。

いつもの道のいつもの角を曲がった時だった、奥にいつもとは違うそれがいた。

瞬間、激しい痛みが男を襲った。辺りにが血の海が広がる。傷を押さえようとしたとき、右腕がなくなっていることに気がついた。

「なんだよ……これ」

男は倒れて動かなくなる。

辺りには狼の遠吠えが響き渡っていた。

警報が鳴り響くと同時に初代は飛び起き、装備一式をつけ作戦室に駆け込む。

「どうしたんですか？」

「今から説明する。座れ」

東山が不機嫌そうに言う。

夜の防衛体制は、2人ずつ3交代である。残りの1人が完全休養となる。交代してすぐ戻されたのだろう。

「警察からの応援要請です。警戒地点A－9でBSCによるものと思われる惨殺事件が発生したとのことですよ」

「A－9で、昼にパトロールしてたところ……」

仲里は絶句している。

「君達のせいじゃない」

西村がフォローを入れるが、仲里は俯いている。

「落ち込んでる暇はないぞ。すぐに現地に行く。装備は市街地戦用、出発は0130だ。以上」

「了解」

初代と仲里は重い足取りで作戦室をあとにした。

2-2. 人と鬼の狭間で

「市街地だからな。銃器の使用には細心の注意を払え。ただ…」

「それに臆病になるな。ですよね？」

北見が言った。仲里はそのとき北見から殺気のようなものを感じていた。

「よし、わかってるな。目標は発見次第殲滅だ。以上」

西村と初代、北見と仲里、東山と南野でバディを組み、3方面から索敵を開始する。

装備はWDUが独自に開発したDA-2機関けん銃、愛称”マルニ”である。人識別システムが搭載されており、人に向けるとトリガーが引けなくなるという安全性を誇る。しかし、対BSCでは1分間に1500発という性能を発揮する。

「副隊長、マルニで大丈夫ですかね」

前を歩く西村に聞く。

「どういう意味？」

「いえ……もし前みたいなどんでもない奴だったら、効きませんよね」

「そのときは殉職するしかないな」

西村は笑いながら答えた。

開始から2時間が経過しているが発見の報告は入らない。嘘のように静寂な夜、唯一聞こえるのは自分達の足音だけである。そんな静寂を乾いた連射音が切りさく。

『こちら仲里、目標を発見。援護願います』

無線が入る。

初代はすぐにGPSを確認する。

「東に400mです」

「急ごう」

西村と初代は走り出す。

＊

敵は素早く動きまわり北見達を翻弄する。

「何やってんのよ！打ち続けなさい」

「でも……」

仲里は民家を気にしてトリガーを引くのをためらっているのだ。

「あんた、死にたいの！」

その時、鋭い爪が北見を襲った。

初代と西村が駆け付けると、倒れた北見と叫びながら弾切れになったマルニのトリガーを引き続ける仲里がいた。

「北見さんを頼む」

西村は仲里に近づいていく。

「もういい」

そう声をかけても、トリガーを引き続ける。西村はマルニを押さえ付け、しっかり目を見て話かける。

「やめるんだ」

仲里は崩れ落ちるように座りこみ、子供のように泣きだした。

「副隊長、出血が止まりません」

北見は「奴を追って」と呻くように声を出している。

「東山、北見が負傷した」

無線で状況を報告する。

『……任務は中止だ。北見を収容して病院に送る。待ってろ』

3分後、南野が運転するD T Fの車両が到着した。

「早く乗せて下さい！」

初代と西村は後部座席に北見を横にして入れる。

「副隊長は助手席をお願いします」

「初代君、仲里さんのことは頼んだよ」

西村がそう言い、車に乗るや否や。サイレンを鳴らしながら車が走り出す。

初代の目にはランプの赤い光がしっかりと焼き付いた。

＊

「私のせいだ」

本部から迎えにきた白木が運転する車の中で、仲里は泣いている。

「北見先輩なら大丈夫だよ」

しかし、仲里は泣き続けている。初代はそれ以外にかける言葉が思いつかなかった。

「お前の涙で何か変わるのか……泣いてる暇があったら強くなれ」

東山が突然怒鳴った。初代はその迫力に驚かされた。そして、仲里も泣き止んだ。

車が本部の駐車場に着くと白木が口を開いた。

「仲里さん、行きましようか」

仲里は白木に連れられて行った。初代は東山の後ろを歩いてついていく。

「隊長、あんな言い方しなくても……」

「あいつのためだ。お前も強くなれよ」

初代は反論しようと思ったが思い止まった。東山の背中がなぜか寂しそうに見えたのだ。

北見の状況が分からないまま、日が登り朝となった。東山の携帯がなったのは午前9時のことだった。慌てて東山が電話に出る。

「どうだ？北見は無事か」

『命に別状はありません。しばらくの入院が必要みたいです』

南野の報告に安堵が広がる。

（本当に良かった）

仲里は心の底からそう思った。

2-3. 人と鬼の狭間で

「仲里です」

ドア越しに遠慮しがちな声がした。

「入っていいわよ」

そう言うと、泣きそうな顔をして仲里が病室に入ってきた。体を起こそうとするが傷が痛む。

「無理しないで下さい」

慌てて仲里が声をかけられる。

「こんなところで何してるのよ」

「心配だったんです。私のせいで……」

「あなたのせいじゃないわ。自分のミスよ。わかったら任務に戻りなさい」

はっきりとした口調で言った。

「でも……」

「同じこと言わせないでほしいわね」

静かにドアを指差す。仲里は従うしかなかった。

＊

「CHN—M03が高尾山に現れたときはどうだったんですか」

「俺も詳しくは知らないんだ。あれは、自衛隊が出動したからな」

「そうですか」

「狼が主体だからな、群れで狩りをするみたいだ」

「群れ……」

南野は運転しながら大きな口を開け欠伸をしている。

「事故起こさないで下さいよ」

「お前が免許持っていないのが悪い」

そこを突かれると、初代は言い返す言葉がない。外を見ると、ちょうど悠紀と会った公園だった。そこには、また悠紀がおり、何かを連れている……

「ちょっといいですか？」

南野に声をかける。

「あれが例の子供か、しょうがねえな」

初代は車を降り、少年の方へ歩いていく。初代に気がついた少年は、無邪気な笑顔で駆け寄ってきた。

「お兄ちゃん！」

「やあ！」

声をかけながら、悠紀が連れているものに注意を払う。

「今日お姉ちゃんはいないの？」

「忙しくてね。代わりにおじさんがいるよ」

初代は車に向かって手招きをする。南野はめんどくさそうに車を降り、こちらに向かってくる。

「おい……こいつは」

南野が悠紀の連れている生き物を見て、驚きの声をあげる。

「やっぱり、そう思いますか」

初代が小さな声で耳打ちする。

「どうしたの？」

悠紀が尋ねる。

「なんでもないよ。それより、その連れてるのは？」

「僕の1番目の友達、名前はシロ。拾って、気づかれないように家で飼ってるんだ」

確かに見た目は白い子犬である。しかし、明らかに何かが違う。

「そっか……この辺は昨日BSCが出たから、今日はもう家に帰るんだ」

初代がうながすと、悠紀は「はあい」と言ってシロを連れて公園を去った。

2人は車に戻った。

「この責任は全部俺がとります」

初代は真剣に言った。

「俺はお前の行動を見て見逃した。俺にも責任はある。8対2でお前が悪いがな」

南野は笑みをうかべながら答えた。

「すみません……」

「でも、副隊長は鬼になるかもしれない。覚悟しとけよ」

今度は真剣な顔つきだった。

＊

基地に戻り、初代と南野は一連の経緯を報告した。

「その判断は間違ってるね。」

西村はバツサリと切り捨てた。

「しかし……」

初代は反論しようとするが、西村の鋭い眼差しがそれを許さない。仲里が心配そうな眼差しで見ている。

そのとき、警報が鳴り響いた。

「CHN—M03が出現」

白木の声が響く。

「東山、作戦はどうする？」

西村はすぐに頭を切りかえた。

「奴は100m3秒の速さを持ってる、本当なら高尾山での一斉掃射がベストだが、市街地では無理だ。以上より、狙撃作戦でいく」

「狙撃ですか？」

初代が聞き返す。

「そうだ。汎用ヘリD R—Jを飛ばし空中から狙撃する」

「ということは俺ですね」

南野が前に出る。

「そういうことだ。元警視庁S A T狙撃の名手の腕を見せてくれ」

「了解」

南野は「準備があるので」と言い残し作戦室をあとにした。

「誰がヘリを操縦するんですか？」

仲里が質問をする。

「私よ」

しれっと白木が言った。

「メカは白木に任せておけ。残りの俺達は、奴を狙撃しやすいように追い立てる」

「了解」

＊

「目標を捕捉！追跡します」

『了解！楽に狙撃できるようにする。待ってろ』

無線から東山の声がする。

「大丈夫です、俺に任せて下さい。一発で仕留めます」

しばらくの沈黙の後、

『……分かった。任せる』

そう言って無線が途切れた。

距離500m、ヘリの揺れ、大気の状態、目標の移動速度、行動の予測、すべてが南野の頭の中で組み合わせられる。

「いまだ」

同時に引き金が引かれた。発射された弾は空を切り、目標を貫いた。

2mもの巨体は倒れこみ動かない。

「目標撃破、あとはよろしくお願いします」

『今度こそ任せろ』

東山が行った。

＊

初代と仲里は「平良」の表札が掲げられた家の前に立っている。後ろでは、南野と北見が見守っている。

狙撃作戦の翌日、下水道でCHN－MO3の死骸が発見された。北見と仲里との戦闘によるものだと判明した。そして、もう1つ重要な任務を課された。

初代は、震える手でインターホンを押す。

「はい」とドアが開く同時に踏み込んだ。

「BSC対処法8条に基づいて強制捜査します」

「息子さんの部屋はどこですか」

扉を開けて回る。「何ですか！止めて下さい」と母親が激しく抵抗する。

「悠紀君がBSCを飼ってるんです！」

初代が怒鳴り声をあげると、母親はへたり込んでしまった。

「そんな……」

2階に上がり、1番初めのドアを開く。

そこには、悠紀とシロがいた。

「…お兄ちゃん？お姉ちゃん？」

すかさず仲里が持っていたケージにシロを入れる。

「何するんだよ！」

叫びながら飛び掛かろうとするのを初代が止める。

「仲里さん、行こう」

組み付く悠紀を振り払い2人は階段を降りた。

「友達じゃないの！！どうして親友を奪うんだよ」

悠紀は泣き叫ぶ。

「失礼しました。後で詳しい説明がありますので」

それだけ言うと2人は振り向くことなく玄関を出た。

仲里は唇を噛み締め何も話さない。そんな仲里に北見は、

「よくやったわ」

優しく声をかけ、抱きしめる。

「任務完了しました！」

「ご苦労さん」

初代は1人歩いていく。

南野が後ろから声をかける。

「おい、男が泣いていいのわ妹の結婚式だけだぜ」

立ち止まって、振り返ったその顔は泣き崩れていた。

「俺！妹いません！！」

初代は走り出した。

2-3. 人と鬼の狭間で（後書き）

グダりました……すみません

多分読んでも人もそんなにいないと思うんですけど、すみません。

自分で読んでもよく分からない話でした、次回頑張ります

3-1. ヒーローの条件

「実践では使用されてない？」

南野が疑問の声をあげる。

「はい。USA-PO1は初の原生動物型BSCとして生み出されましたが、特徴である大量増殖に致命的な欠陥があって投入されなかったようです」

「致命的な欠陥？」

南野がまた質問する。

「増殖個体を統制できなかったようです」

「なるほど」

納得した顔で頷く。

時は、24時間前に遡る。体長2mのアメーバであるUSA-PO1が臨海開発地区に出現した。これが人間を捕食、分裂を繰り返し爆発的に増えたのだ。政府は避難命令を出し、住民は今のところシエルターに避難している。

難しい顔をした東山が作戦室に入ってきた。

「対策会議はどうだった？」

「住民を臨海開発地区から脱出させるのが第1目標となった。これは自衛隊、警察と協力して行う」

「殲滅はしないんですか？」

北見が聞く。

「脱出させた後、自衛隊が派手にやるらしい」

東山はやれやれという顔をして、椅子に腰掛けた。そしてタバコに火をつけた

「作戦は各シエルターにヘリで降下、展開し、順次住民の輸送を行う」

「うちのヘリは使いますか？」

白木が尋ねる。

「いや、使わない。あくまでも政府主導という所を見せたいらしい」

東山は煙を吐いた。「そうですか」と白木は残念そうな表情を浮かべる。

「作戦決行は5時間後！それまでは装備を点検次第、自由行動。以上」

タバコを灰皿にぐしゃぐしゃと押し付け、東山は作戦室をあとにする。

「あれは、そうとう苛立ってるな」

西村が呟いた。

＊

「自衛隊特殊戦部隊の金村です」

「警視庁SATの三島です」

「DTFの東山です」

代表者が自己紹介し、握手をする。顔合わせもそこに金村が作戦の説明をする。

「シエルターは全部で5つあり、配置は各隊長にお伝えします。輸送の方は第1空挺団で行います」

金村が東山の方に歩いていく。

「DTFは3人ずつ、それぞれA、Dシエルターをお願いします」

「3人で守るんですか？」

仲里が言う。

「当然、他の部隊も展開します。まさか、仲間同士じゃないと戦えないなんてことはないですね」

金村の馬鹿にした口調に、南野が掴みかかろうとするが、西村に止められる。

「使えない奴は帰ってもらって結構ですから」

そう言って、SATの方へ歩いていく。

「小さい男ね」

北見がぼそりと呟く。

「仲良くやれとは言わない、ただし任務は遂行しろ」

東山は複雑そうな顔で言った。

東山と西村は話し合って、東山、北見、初代がAシエルター、西村、南野、仲里がDシエルターと決めた。

空挺団のヘリコプターに乗り込んで行く。

澄んだような青空の下、次々とヘリコプターが飛び立っていった。

3-2. ヒーローの条件

作戦本部 通信室

『こちらBシエルターの特殊戦部隊2班高井です』

「どうした高井」

金村が聞く。

『住民が確認できないのですが……ん、あれは』

「何かあったのか？」

突如、無線を通して銃声が聞こえた。

『下がれ！下がれ！』

「どうした！」

応答がない。

『数が多すぎる、作田！前に出過ぎだ』

『嫌だ！助けて』

『援護しろ！！』

『くそ！駄目だ、屋上まで撤退』

通信室には現場のリアルな声が響き渡る。

『山下！後ろだ』

叫び声が聞こえる。

『本部！ヘリを戻して下さい』

「どうした、状況を報告しろ」

『早く！早くヘリを』

まったく会話が成立しない。

『うっ……』

低い呻き声とともに通信が途切れた。静まり返る通信室。1人のオペレーターが口を開いた、

「Bシエルター、特殊戦部隊高井班及び辻岡班……シグナルロストしました」

ドン！！

金村は机を叩いた。

*

Aシェルター

ヘリから20名が、屋上に降り立った。編成は特殊戦部隊権堂班10名、園田率いるSAT第1分隊7名、DTF東山班3名である。

「おい、お前！先に行け」

権堂に指をさされたのは初代である。一瞬、緊張が顔に表れたが、すぐに取っ手に手をかけ一氣に開ける。

ビュッ！！

飛んできたものを咄嗟にかわし、銃を構える。

「待ってくれ」

そこには6人の男がいた。

「てっきり怪物がやって来たのかと」

代表らしき男が言う。

「大丈夫です。救出に来ました」

初代は笑顔を見せる。

「早く案内させろ」

権堂が後ろから怒鳴る。そのとき、無線が入った。

『本部より各隊へ。Bシエルターの部隊が全滅。早急に任務を完了されたし』

「全滅……」

場の空気が凍りついた。

「急ぎましょう」

東山が進言する。

「そんなことお前に言われなくても分かってる」

権堂は先頭を切って歩き出した。

シエルターは、2階建ての特殊金属製で戦車の砲弾や、ミサイルにも耐えられるよう設計されている。

「2階には女性、老人、子供を優先的に入れています」

代表らしい男が説明を始める。

「で、あんたは」

権堂が聞く。

「あ、私ですか。安達といいます。Bシエルターの管理人をしています」

シェルターには混乱を避けるため、管理人が常時詰めている。

「今、シェルター内にはどのくらいの人がいるんですか？」

東山が聞く

「およそ1200人です。お盆と重なったおかげで、少なくとも済んでますよ」

「早速だが、ヘリ5機で100名ずつ輸送を始める。順番はそっちに任せる」

権堂が安達に指示する。

2階のフロアにつくと、救助が来たことに安堵が広がった。歓声をあげる者もいた。

「SATとDTFは1階で警備。俺達が2階から上を担当する」

命令通りに東山と園田は隊を率いて1階に降りた。

「おお、助けがきた」

「見捨てられたかと思ったよ」

「助かったー」

歓迎の言葉をあび、隊員達も笑顔になる。

「想定される侵入経路は正面口しかありませんね」

「正面口に5名の2交代で警備しましょう」

東山と園田が話し合い、体制を決める。DTFの3人にSATの山岸と田井が加わることとなった。

「4往復目」

北見が呟いた。

「てことは400人ですか」

「上には700人いたから、あと3往復」

「結構時間かかってますね」

正面口警戒中、突如悲鳴が上がった。

『我々が行きます。正面口を頼みます』

園田から無線が入る。園田達は悲鳴が聞こえた、トイレへと向かっていく。

住民達も緊張の面持ちで見つめる。

隊員の1人がドアを開けた瞬間、

ドン！

P01に飲み込まれた。

悲鳴が飛び交う。

「撃て！撃て！」

園田の号令で一斉に銃弾が浴びせられるが、トイレの奥から溢れるようにP01が現れる。

東山が即断する。

「1階を放棄！北見、山岸、田井は住民を2階に移せ！初代は俺と来い」

3人が慌てふためく住民達を2階に誘導する。

東山と初代は、園田達の援護に回る。

「隙をみせるな、撃ち続けろ！」

P01の勢いは凄まじく、ジリジリと後退させられる。

「もう少し踏ん張れ！」

東山が声を張り上げる。

『避難完了』

北見から無線が入る。

「走れ！！！！」

一斉に全員が走り出す。同時に物凄い勢いでP01が迫る。先着した園田が階段と1階の間の防火シャッターを閉める。

ガコン！

「助かった……」

全員が安心した瞬間、後ろにP01が現れた。

「うわ！」

「柳原！」

少しずつ飲まれていく。

「撃て！援護しろ」

「下の隙間から侵入してます」

初代が声を上げる。シャッターと床の間に物が挟まり、その隙間から次々にP01が入ってくる。

「無理だ、諦めろ」

東山が園田の肩を掴む。

「……全員下がれ」

「見捨てるんですか！」

SATの隊員が言う。

「下がれ！！命令だ」

園田は怒鳴り声をあげる。

5人は唇を噛み締めながら2階へと上がる。

「助けて、死にたくない！！！」

叫び声が聞こえる。2階に着くと防火シャッターを下ろした。そして何も聞こえなくなった……

3-3. ヒーローの条件

「侵入を許すなんて、使えんな」

「てめえ！仲間が2人死んでるんだぞ」

「井下、やめろ！」

園田が権堂に掴みかかろうとした隊員を止める。

SATと特殊戦部隊の隊員が小競り合いを始める。

「少しは黙ってられないの」

冷たい顔をした北見が間に入る。

「なんだこの女！」

瞬間、その男は床に沈んでいた。

「聞こえなかった？黙れっていったのよ」

あまりの迫力に静まり返る。

「北見、その辺にしとけ。問題とすべきは侵入経路だ」

北見を諫めながら東山が言った。

「お前らのミスだろ」

権堂がつつかかる。

「それは否定しませんが、問題はより深刻だと考えられます」
あつさりと非を認められたことで、権堂は非難の矛を畳むしかなかったのか口を挟まない。

「ポイントはトイレから現れたということ」

「まさか……屋上の貯水タンク」

園田が指摘する。

「馬鹿か。それなら他の所からも出る。そもそも、屋上にいたなら、へりに乗るところを襲うだろ」

強い口調で権堂が否定する。

「いや、そのまさかです」

「根拠のない、戯言だな」

「知性があるんですよ。少ない獲物を我慢して、多い獲物を狙った……」

全員が息をのんだ。BSCは何らかの生物を主体として創られる。創造の過程で様々な能力を付与することも可能である。しかし、知性の付与が成功したという記録は公式には存在しない。

「本部に連絡する。警備を怠るな」

権堂は離れて、本部と連絡を取り始める。

「屋上を確保する必要があるな」

東山が難しい顔で呟いた。

＊

「本部に連絡して、すでに任務を完了したDシェルターのヘリをこちらに回すよう手配した」

「西村副隊長早いですね」

初代が感心したように言う。

「あそこはあいつが指揮してただろうからな」

合理主義者の西村にこり押しは通用しない。まして論戦を挑もうなどとは愚かの極みとも言える。唯一、西村に勝てるのはここにいる東山だけである。

「援軍は来ないんですか？」

田井が尋ねる。

「そんなの来るわけないだろ」

吐き捨てるように権堂が言う。
プライドだけは高い権堂がそんなことをするわけがない。

「屋上の安全を確保すべきだと思いますが」

東山が進言する。

「お前はいちいち口を挟むな。早坂！隊の半分をつれていけ」

特殊戦部隊の副隊長に命令を下す。権堂は明らかに冷静さを欠いていた。

「5人ですか？」

早坂が困惑しながら聞く。

「早くしろ！」

早坂は4人を選抜し屋上へと向かう。

「行かせていいんですか？」

初代が東山に聞くが何も答えない。

やがて激しい銃声が聞こえてきた。住民達はたちまち冷静さを失い、右往左往する。

「隊長！」

東山は目を見開いた。

「北見、初代来い！」

屋上に向かおうとする東山を権堂が止める。

「手柄は渡さ……」

東山はホルスターから拳銃を抜き、銃口を権堂に向けている。

「あんたには上に立つ資格がないんだよ」

冷たく言い放ち、屋上へと駆け出す。

権堂は立ち尽くしている。

「お気の毒ね」

北見が通りすがりに呟いた。

＊

3人が駆けつけたときには、早坂ともう1人の隊員しか残っていなかった。

「撃て！」

早坂達を援護する。

「すみません。助かります」

泣きそうな顔をしながら早坂が礼を言う。

「礼は後にしろ」

屋上には14体のP01がいた。分裂によって数を増やしたのだ。

「くそ!!」

銃とP01の相性は非常に悪い。銃弾は小さな穴を空けるがすぐに修復されてしまう。

「マシンガンは駄目だ。北見、散弾銃を使い」

北見は背負っていた散弾銃に慣れた手つきで弾を装填する。

ガシャ！ ドン！！！！

近距離で放たれた弾丸はP01に風穴を空ける。そして、そのまま崩れさる。

「効いてるな。14体だいけるぞ!!」

東山は声を張り上げて鼓舞する。手持ちの弾を撃ち尽くした頃には、動く敵はいなくなっていた。

「終わったあ」

早坂が笑顔で言う。

「みんな良くやった。戻るぞ」

東山も笑顔で返す。全員が階段を下りようとしたとき、

ゴポツゴポツ！

ビチャ！

嫌な音に全員が振り向いた。

タンクからP O 1が溢れ出ていた。さらに下の階からも銃声が響いてきた。

「下も…」

「嘘だろ…」

絶望の声がもれる。

使える装備は護身用の拳銃しか残っていない。

「ここまでか……」

諦めかけたそのとき、D T Fの3人には聞き慣れたローター音が耳に響いてきた。

『諦めるのは早いんじゃないか』

「西村！」

白木の操縦するD R ー Jから噴射器を装備した無数の人影が降下してくる。

「噴射！！」

命令と同時に白いガスが噴射され辺りを包み込む。

「冷たい……」

北見が呟く。

「冷凍ガスだからね。こいつらは凍らせると生きてられないんだ。アメリカが情報を隠してた」

西村が白いガスの中から現れた。

「東山、手こずってるみたいだね」

西村がにこっとして話しかける。

「別に問題なかった。お前こそ勝手にDR-J飛ばすなんてな」

「勝手に？まさか！ちゃんと許可は取った。問題ない」

笑いながら言い放つ。

「それより、下も危ない。頼む」

「それを先に言ってくれよ」

西村は南野、仲里を連れて階段を駆け降りる。

東山達もあとに続く。

ダン！

扉を開くと、住民達は片側により集まり、園田達は銃を構えていたもののP01は確認出来なかった。

「大丈夫か、権堂は？」

東山が聞く。

「何とか鎮圧出来ました。権堂さんは……子供を庇って」

園田が答える。

「あいつが……最後はヒーローになったな」

東山は悲しげな顔で言った。

「またいつ現れるか分からない。輸送を早く再開しよう」

「お前はいつも現実的だな」

「褒め言葉として受け止めておくよ」

その後、輸送完了と同時に自衛隊が陸、空から掃討作戦を開始しP01を殲滅。

この事件では特殊戦部隊67人、SAT12人、民間人874人が犠牲となった。

＊

D T F 作戦室

「よく1人も死なずに戻ってこれたな」

南野が安堵の表情を浮かべながら言った。

「本当に良かったです」

仲里は涙声になっている。

「そうだ、お前らに嬉しい報告がある」

東山が唐突に話します。

全員の視線が集まる。

「支部長から、各自に交代ではあるが1日の休暇が与えられる」

「はあ」

「1日……」

「半日じゃないだけましね」

冷たい反応が飛び交う。

「うるさい!! 本当ならヒーローに休みなんかないぞ」

「じゃあ東山は休みなしでいいね」

「……俺はヒーローじゃない!!」

作戦室を笑い声が包んだ。

3-3. ヒーローの条件（後書き）

読んでくれた方々に感謝します。

まあ相変わらずグダってますね。

キャラが定まっていないし……

次回からは、番外編ということにしてキャラ設定を明確にしたいと思います。

番外編・南野公康の休日（前書き）

休みの日に一体何があったのか……！！

番外編 南野公康の休日

「南野！北見！」

「はい」

俺と北見は隊長に呼ばれた。

「お前達が休暇1号だ。明日の任務が終わり次第ゆっくり休んでくれ。以上」

1ヶ月ぶりの1日休暇だ。正直、急に休みになっても思いつくことがない。

とりあえずあいつらに連絡してみるか。

＊

自分の部屋に戻り、携帯を開く。

仲の良い奴を何人か pick upして電話をかけてみる。

呼び出し音になる。

ブツ

「もし……」

『留守番電話サービスに接続します』

まあ予想はついていた。仲の良い奴はみんな警察官だから忙しいの
だろう。ただ、8人中7人とは……

最後の1人に発信する。

プツ

『どうしたんすか？先輩』

「よう！須藤。元気か？」

『まあ。で、何かようすつか』

「ああ……明日暇か？」

『ちょうど非番っす。あ、どっか行くんすか？なら海しか行きたく
ないです』

「海……」

『夏と言えば海と女で決まりですよ。じゃあ、8時に迎えに来て下
さい』

「ちょ、まっ！」

プツ

須藤は、俺が交番勤務のときに後輩として入ってきた。相変わらず

先輩に対する礼儀を知らない奴のままだ。

顔は福山雅治に阿部寛を足して2で割ったような感じだ。まあ、この説明で伝わったことはない……要するにイケメン。若干、軽い感じがたまに傷になる。

「海……まあいいか」

俺はあの鰐のことを思い出していた。

＊

朝起きてみると、太陽がギラギラと光輝き絶好の海水浴日和だった。

「さて、行くか」

荷物を積んで、車を出す。

須藤の配属は八王子市で、まだ独身寮に入っている。

俺がいたのは2、3年だったが懐かしく感じる。

寮の前に車を止めるとすかさず須藤が乗り込んで来た。

「どうもっす」

「どうもじゃねえよ。先輩をこき使いやがって」

「誘ったのは先輩じゃないっすか」

須藤は少しもビビらないから正直疲れる。

「で、どここの海だ？」

「湘南でお願いします」

「しょうがねえな」

車を走らせる。

「先輩！」

「なんだよ」

「タクシーみたいっすね」

「うるせえ」

「後で酷い目に会わせてやるからな」と心に止めておいた。

この時期の平塚方面に向かう道はえらく渋滞する。

おかげで須藤の無駄話を長く聞くハメになった。

結局着いたのは11時過ぎ。

ここは東京から日帰り海水浴も出来、家族にも人気のスポットで、ビキニのお姉さん達も一杯いる。

「やっぱいいっすね」

「あんまり、キョロキョロすんな。疑われるぞ」

「大丈夫っすよ。一応は警察官ですよ」

＊

トボトボと須藤が歩いてくる。

「遅かったな。待ちくたびれぞ」

「なかなか信じてもらえなくて……上司に電話しましたよ。カメラすら持っていないのに」

「まあ、お前が悪い」

須藤はあまりにもキョロキョロしてたもんだから、事務所に連れていかれた。

しょんぼりした姿は同情を誘うが、ざまあみろとも思う。

「決めました。自分、彼女作ります」

また妙な決心をしゃがった。

「彼女と来てたら、こんなことにはならなかった。違いますか」

「確かに、そう……」

須藤は女の子に駆け寄っていていた。

「それが駄目なんだよ」

俺は1人呟いていた。

須藤は20回あまり撃沈を重ね心が折れて、戻ってきた。

「めっちゃめっちゃタイプな子がいたんですけど、怖いお姉さんが睨んでくるんですよ……」

「そっか、可哀相にな」

適当にあしらう。

「ひどいですよー」

「そうだな。じゃあ泳いでくるから、荷物番してろよ」

せっかく海に来たのに泳がないのはもったいない。トレーニングもかねて、とにかく泳ぐ。

周りからしたら変な奴だと思われるだろうが関係ない。

1時間ちかく泳いで海からあがってくると須藤が駆け寄ってくる。

「先輩、さっき話した女の子がピンチです」

「お前……警察官だろ」

「僕は文系なんで」

先輩には強いが、喧嘩なんかには滅法弱い。

須藤が指差す方を見ると、女の子が男3人に囲まれている。多分、強引なナンパだろう。

「しょうがねえな」

男に向かって歩いていく。

「嫌がつてるんだからやめとけ」

「そうだ！」

黙ってくれ須藤。

「何、この子の彼氏かなんか」

「まあ違うな」

「じゃあ口挟まないでくんないかな」

如何にもチャラチャラした男で、喋り方から腹立たしい。

俺の怒りのボルテージが上がってくる。

男の1人が女の子の腕を掴んだ瞬間、限界に達した。

「おまつ……！」

その瞬間、男の1人が吹っ飛んだ。状況を飲み込めないうちに2人目、3人目とDOWNしていく。

呆然していると視界の端に何かが入ってきた。

ゴッ！！

ゆっくりと倒れていくように感じた。須藤の声が遠くに聞こえる。

この感じ……初めてじゃないな。

俺は意識がなくなった。

＊

ここはどこだ。

周りが暗くなっている。

「何時になっちまったんだ……」

「7時よ」

隣から聞き覚えのある声が聞こえてゾツとした。

「き……北見？」

「油断してるからそうなるのよ」

「ビックリしたわ。いきなり上段まわし蹴りとはな」

「訓練のときは避けてるじゃない」

「訓練と実戦は違うだろ。あー流石に効いた」

まだ頭がガンガンする。

「ところであの子は？」

「美奈子のこと？さっき須藤って人が送っていったわ」

さすがだな……あいつ。先輩を置いていくしたたかさ。

「美奈子って知り合い？」

「……妹よ」

俺は盛大に吹き出した。

「もう1発くらいいたい？」

「いやーやめときます」

強い海風が吹き付け、暑さが和らいでいく。

「家族、あの子しかいないのよ」

いつもは冷静で強い女性だが、今日は違う。何と云うか、悲しげな感じがする。

「泣きたいときは泣けよ」

「南野……やっぱりあんたは馬鹿ね」

「そうかもな」

いつもの調子に少しほつとする。

「私は泣かないわよ。強くなるって決めたから」

「了解。じゃあ基地に戻るか」

俺は立ち上がって駐車場に向かって歩き始める。

後ろからキーが投げられた

「それ私の車のキーよ。あんたの車は後輩が乗っていったわ。」

須藤、次の休み覚えておけよ。

須藤のことで頭が一杯で油断していたとき

「ごめん……ありがとう」

波に掻き消されそうな小さな声だったが確かに聞こえた。

俺はそれだけで嬉しくなった。

「どういたしまして」

俺も小さな声で返す。

星の綺麗な夜だった。

番外編 南野公康の休日（後書き）

読んでくれた方々に感謝します。

相変わらずの稚拙さ。読んでて若干恥ずかしいです。

うまくなれるように頑張ります。

4-1. 闇への挑戦(前書き)

人間は古来より闇を恐れた。

科学が発達しても闇を消し去ることはできない。

4-1. 闇への挑戦

「ここが噂の場所か」

「如何にもって感じね」

「なあ、やめとこうぜ」

2人の男と1人の女が洞窟の前で喋っている。

「佐藤は本当ビビりだな」

「何とでも言えよ」

「置いて行きましょ」

2人は懐中電灯を掲げて、闇の中へと消えていく。

「知らねえーからな」

洞窟内に声が響き渡る。

静かな夜であった。周りには人工的なモノは何もない。夜空には満天の星が光り輝いている。

佐藤はふと時計を見た。待ち始めて30分も経っている。

「おーい、まだかよ」

洞窟内に声は響いていくが、返事はない。
目を凝らして闇を見つめる。

「ん？」

8つの光がこちらに向かってくるのに気付いた。

あれは……

佐藤は怖くなった。急にその場を離れなければならない気がした。

（動け……動け……）

突然金縛りにかかったように体が動かなくなる。

徐々に光が近づいてくる。

（やばい！ダメか）

その時、携帯が鳴った。

瞬間体が動くようになった。

佐藤は全力で洞窟を離れる。

走りながら、携帯を取り出しある番号をP u s hした。

＊

「昨夜一般回線に通報がありました。緊急性はないと判断しました」

初代が報告する。

「内容は？」

西村が聞いた。

「はい。肝試し中に友人が消え、光る何かを見た」と

「確かにいたずらっぽいな」

南野が言った。

「ですよね。一応、通報者の名前と住所は控えています。えーと、鎌倉市の佐藤弥さんですね」

「年齢は？」

白木が聞いた。

「24歳です」

白木は考え込んでいる。

「知り合いか？」

東山が問う。

「よくある名前なんでわかりませんが、可能性はあります」

「だとしたら、この通報どう思う？」

「おそらく……本当に何か起こったのかと」

白木は自信なさげに答える。

「そうか……なら、初代と白木は通報者に接触。事情を聞いて現地調査に向かってくれ」

「ありがとうございます……」

白木は複雑そうな顔で礼を言った。

＊

「よく迷わないでここまで来れましたね」

「実家に連絡して年賀状の住所見てもらったら、あんたが控えたのと同じだったのよ」

「なるほど。ところで……どういう関係だったんですか？」

初代が遠慮しがちに聞く。

「元彼氏。大学時代の」

白木はすっぱり答えた。

「なんかすみません」

「別にいいわよ。それより、私調査にあんまり出たことないからよろしく」

初代の肩を叩く。

白木はオペレーターとして基地に残ることが多い。故に白木が調査に行くことは珍しい。

「任せて下さい」

勢いよく初代が意気込む。

白木がIDをパネルにかざす。

インターホンからインターパネルというシステムが主流となっている。

インターパネルに個人IDをかざすと、家の中の受信機に名前等々の個人情報が表示される仕組みになっている。

すぐに男が飛び出して来た。

「百合子!!」

「下の名前で呼ばないでよ。あんたね、大人が肝試しなんてやるん

じゃないわよ」

怒った口調で白木が言う。

「ごめん……百合子」

「また言った。やめてって言ってるでしょ」

初代は困惑していた、どう割り込んでいいか分からないのだ。

「ちょっと初代！何突っ立てるのよ」

「は、はい」

（性格変わったな……）

初代は困惑しながら状況を尋ねた。

「昨日のことを詳しく教えてくれますか？」

「えーと、ネットで噂になってる心霊スポットに行ったんですよ」

「心霊スポット？」

「戦争のときに防空壕として使われてた洞窟なんですけど、そこに入ったら帰って来れないみたいな噂があって」

「それで、入った2人が帰ってこないわけですね」

「はい。携帯も繋がらないし」

「驚かそうとしてるんじゃないの」

白木が口を挟む。

「その可能性も考えたけど……違うと思う」

「あんたがそう言うなら多分そうね」

初代は白木がなぜ信じるのか疑問に思ったが質問を続けた。

「えーと、光については？」

「8つの赤っぽい光でした」

「懐中電灯は当然持ってたわよね？」

白木が唐突に質問し始めた。

「うん」

「大きな声とか音はださなかった？」

「中ではわかんないけど、俺は洞窟に向かって叫んだ」

白木は1つの結論に辿りついた。

「おそらく、CHN－B06だわ」

4-2. 闇への挑戦

「CHN-B06による被害だと断定しました」

白木達は基地に戻って報告する。

「根拠は？」

西村が聞く。

「これを見て下さい」

アーカイブのCHN-B06の情報がモニターに映し出される。

「蜘蛛……見ただけでゾッとするぜ」

南野は不快そうに顔を歪める。

「B06は中国がゲリラ戦を想定して創ったBSCです。夜行性でテリトリー内に侵入した光もしくは音を出すものを攻撃します」

「中の2人は懐中電灯、佐藤さんは洞窟の入口で大声を出したため襲撃されたと考えられます」

初代が説明を加える。

「なるほどな」

東山が納得する。

「状況的には黒だね。だけど、正確に特定してから最善を尽くすべきじゃないか」

合理主義者の西村が反論する。

「私もそう思います。相手が違ったら戦い方も変わりますから」

北見も西村の意見に同調する。

「B06は捕らえた獲物をすぐに食べません。今行けば被害者を救出できる可能性があります」

白木が反論する。

「可能性と割り切るべきだ。しかも、B06に関する情報が少な過ぎる。救出は難しいし、危険だ」

「中国のDTFに情報の開示を求めれば」

「中国は、こないだのアメリカみたいに簡単には情報開示しないよ」

「ですが」

「ストップ！ストップ！！」

議論に東山が慌てて割って入る。

「2人の意見はよくわかった。とりあえず、他の意見も聞いてみようじゃないか。南野！」

「俺ですか、俺は……白木の意見に賛成です。救える命を見捨てるわけにはいきません」

「僕も白木先輩の意見に賛成です」

初代も意見を述べる。

「仲里はどうだ？」

東山が聞く。

「私は……」

心苦しそうな顔で俯いてしまった。

「はっきり言った方がいい」

東山が諭す。

「私は被害者の命よりも、ここにいる6人の命が大切です。なので、危険過ぎる作戦には反対です」

仲里は意を決したように述べた。

全員殴られたような衝撃を受け、動揺が作戦室に広がる。

「弱ったな……」

東山も狼狽して考え込む。

しばらくの沈黙の後、東山は決断した。

「西村に賛成の者は現地調査、白木に賛成の者は情報収集及び作戦の立案。以上！」

「完全に真ん中とりましたね」

南野が突っ込む。

「名案と言え」

東山は笑顔を見せた。

＊

「日本支部外渉局の長内です。王黄伝さん、ご無沙汰してます。単刀直入なんですが、B06の情報を全て開示して頂きたいのですが」
長内は外渉局のエースで6ヶ国語をマスターしている。東山が無理矢理引っ張って来たのだ。

「王黄伝は中国支部外渉局のトップだ」

南野が驚いた顔で言う。

「長内さん、全部日本語で話してるけど大丈夫なんですか？」

初代が聞く。

「あれがやり方らしいわ」

白木が答えた。

「ちょっと集中しなさい」

開発局の赤松がたしなめる。作戦立案の為に、彼女もまた東山が引っ張って来た。

「すみません」

3人は声を合わせて謝る。

「1番速いのは殺虫ガスで洞窟内を満たすことね」

「それじゃ要救助者も危険です。それに…殺虫ガス効くんですか」

白木が聞く。

「多分大丈夫よ強力なのあるから。でも、ボツか……」

それからしばらくの間、話が進展しなかった。情報が少なく立案のしようがなかったのだ。

「閃光音響手榴弾で入口までおびき寄せて、直接殲滅はどうですか？」

初代が提案する。

「それ、使えるかも。作戦甲としておきましょう」

「赤松、お前が仕切るなよ」

南野が言う。南野と赤松は同期で仲はあまりよくない。

「うるさいわね。使えないから黙ってなさい」

「なんだと」

「集中しなさい!!」

喧嘩を始めた2人を白木が一喝する。

「すみません……」

2人は揃って謝る。

「楽しそうだな。今、西村から連絡があった。CHN—B06だと確認したそうだ」

「速いですね」

僅かな2時間の早業であった。

「あいつらは向こうで待機、こっちは作戦指揮車で向かう。準備しろ」

「やばい……」

4人は顔を見合わせた。

「着くまでの30分でなんとかするんだな」

東山はニヤニヤしながら言った。

「こっちは終わりましたよ」

長内は疲れた顔を見せた。USBを白木に手渡す。

「全開示は無理でした。情報はその中にまとめてあります」

「ご苦労！」

東山が肩を叩く。

「無茶言うのはこれっきりにして下さい」

長内は明らかに不快そうな顔であった。

「まあ、そう言うな」

「はあ」深いため息をついて、長内は作戦室をあとにした。

4-3. 闇への挑戦(前書き)

遅くなってすみませんでした。

忙し過ぎて執筆も途中で……

戦闘パートは、なるべく早く投稿します。

4-3. 闇への挑戦

「遅かったね」

作戦指揮車で現場に到着した東山を西村達が出迎えた。

「お前が速いんだ」

「ところで白木さん達は？」

「中で頭抱えてるよ」

笑いながら東山が言った。

それを聞いた西村はニコリともしなかった。

東山は西村達を連れ車両の作戦室に入る。

「お疲れ様です」

白木達は敬礼で出迎える。

「お疲れ。早速なんだけど作戦を聞こうか」

「……」

「出来ないことを出来るって言った責任は重いよ」

西村の冷たい口調が白木達の胸に突き刺さる。

「あなたは何か考えたの？」

赤松が言った。この時、南野は東山がどうして赤松を呼んだかに気がついた。

赤松は東山に似ているところがある。北見は西村に似ているのだが……

東山は作戦を立てられないことを見越して、西村に対抗できる赤松を呼んだのだ。

「君達に任せたはずだけど」

「時間はあつたはずよね」

「責任の転嫁はやめてくれないかな」

「そうじゃないわ！」

赤松が語気を強めた。

「立案出来なかったのは私達が悪いわ。でも、あの時点で立案が困難なことは、あなたなら分かっていたはずよ」

「だから？」

「助け合うのが仲間じゃないの？」

全員が沈黙した。

「はあ」西村は深いため息をついた。

「東山も厄介なことしてくれるね」

「まあな」

東山はニヤニヤした表情を浮かべている。

「気持ちだけじゃ何も変えられない。3人ともこれだけは言うておくよ」

「はい……」

「よし。じゃあ、僕から作戦を提案する」

あらかじめ全て準備してあったのか、西村が全員に向かって言った。

素早くマウスをクリックする。

「今モニターに写したのは、洞窟の内部構造」

全員がモニターに視線を向ける。

「入口から200mは真っすぐ、そこから道が3つに別れる。左は奥に100m、中央は80m、右は110m続いてる。次にこれを見て下さい」

別の画像が写しだされる。

「調査に使った遠隔式小型偵察車の熱探知の画像なんだけど、左に

複数の熱源を確認。中央に大きな熱源があることを確認した」

「要救助者は左、本体は真ん中ってことですかね」
南野が口を開く。

「その可能性が高い」

西村が答える。

「情報によるとB06自体は大したことはない。問題はトラップだ」

東山が言う。

「蜘蛛の糸……」

初代が呟く。

「全員動けなくなるなんて、洒落にもなりませんよ」

南野はニヤニヤしながら言う。

「東山、3班に分けて作戦を行おうと思ってるんだけど？」

「救助、殲滅、バックアップだな？」

西村が頷く。

「俺と白木、初代は救助。西村と北見、仲里は殲滅。南野と……赤松はバックアップだ」

東山の編成に南野のにやけた顔は吹っ飛んだ。

「嘘だろ……」

「じゃあ、それぞれの手順を説明するよ」

西村は南野の声が聞こえなかったかのように説明を始めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6670y/>

英雄

2011年12月16日18時47分発行